

地 理 歴 史

世界史 A, 世界史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

世 界 史 A

1 前 文

本年度の「世界史 A」の受験者数は1,271名と、昨年度の1,408名から137名減少したが、科目選択率は昨年度と変わらず0.4%となっている。本試験の平均点は36.32点で、「世界史 B」の平均点58.43点とは22.11点の差があり、センター試験時と変わらず、両者の平均点には開きがある。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

(1) 評価の観点

年度・出題数 設問形式	令和5年度	
	出題数	(出題率)
主に知識・技能を評価するもの	23	(76.7 %)
主に思考・判断を評価するもの	7	(23.3 %)
合 計	30	(100.0 %)

(2) 分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	令和5年度	
	出題数	(出題率)
政治史	20	(66.7 %)
社会経済史	3	(10.0 %)
文化史	6	(20.0 %)
複数分野に関わる	1	(3.3 %)
合 計	30	(100.0 %)

* 知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、評価・分析委員会の判断による。

(3) 時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	令和5年度	
	出題数	(出題率)
古代史	1	(2.7 %)
中世史	2	(5.4 %)
近世史	1	(2.7 %)
近代史	13	(35.1 %)
現代史	12	(32.4 %)
[うち戦後史]	7	(18.9 %)
複数時代混合	1	(2.7 %)
合 計	30	(100.0 %)

(4) 地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	令和5年度	
	出題数	(出題率)
西欧・北米	6	(20.0 %)
東欧・ロシア	1	(3.3 %)
東・内陸アジア	9	(30.0 %)
南・東南アジア	5	(16.7 %)
西アジア・アフリカ	4	(13.3 %)
中南米・オセアニア	1	(3.3 %)
複数地域に関わる	4	(13.3 %)
合 計	30	(100.0 %)

中世(5c~14c)・近世(15c~17c)・近代(18c~19c)・現代(20c~)を判断の目安とする。

第 1 問 世界史上の史跡

問 1 文章中の空欄に入れる人物の政策について、適当な文を選択する問題。会話文の読み取りよりナポレオン3世を特定し、その治世の政策について問う、知識・技能を問う問題。

問 2 文章中の空欄に入れる戦争に関して述べた文の正誤について、正しい組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問 3 文章中の人物が万国博覧会に関わった理由と、印象派の絵画について、正しい組合せを選択する問題。資料から情報を読み取る技能と、印象派についての包括的知識を組み合わせた知識・技能を問う問題。絵画資料そのものを問う工夫が見られた。会話文中にある幕府と藩が別々に出展したという記述より、当時の国民国家のあり方を問う設問などに発展させることができ

たかもしれない。

問4 中国とその周辺諸国との関係について適切な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。

問5 文章中の空欄に入れる語句と、ハンゲルについて述べた文について、正しい組合せを選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う問題。空欄「ウ」は、歴史的知識と会話文や写真資料から読み取った内容とを複合的に利用した上で「独立」の概念について考察する、思考力・判断力・表現力等を問う良問である。

問6 大韓帝国が存在した時期の朝鮮半島について、適切な文を選択する問題。問5で考察させた「独立」の概念と関連して、この時期が日本による併合前であることに気付かせる包括的知識を問う良問である。選択肢が全て正命題であるという工夫もなされている。

第2問 近現代における国のあり方

問1 文章中の出来事の原因について、適切な文を選択する問題。「忘れられない事件」とは何かを文脈より推論し、選択肢よりその契機となった第四次中東戦争との関連性を考えさせる、思考力・判断力・表現力等を問う良問である。選択肢が全て正命題であるという工夫もなされている。

問2 1920年代の出来事について、適切な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。

問3 1973年以降に見られたアメリカ合衆国の変化について、適切な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。出来事が生じた時代で選別できる選択問題になってしまったのが惜しい。その後のアメリカ合衆国の「小さな政府」への変化について、例えばレーガノミクス成立の根拠を問う問題などの思考力・判断力・表現力等を問う問題に発展した可能性があったかもしれない。

問4 文章中の空欄に入れる仏教の系統とその伝播経路について、正しい組合せを選択する問題。上座部仏教とその伝播に関する包括的な知識を問う問題である。

問5 文章中の空欄に入れる国の対外政策について、適切な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。

問6 タイの地図とその歴史的変化について、適切な文を選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う良問。リード文や地図の表記を読み取り、歴史的知識を組み合わせた概念的な理解を踏まえた上で、国のあり方について考えさせる点が優れている。また、問いが小問全体の主旨を踏まえた設問である点も評価できる。

問7 文章中の空欄に入れる戦争の時期について、適切な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。

問8 文章中の空欄に入れる語句と文について、正しい組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。会話文の読み取りを基に、知識を踏まえて、映画の第二章のタイトルと、その時期の出来事を選択する、ユーゴスラヴィアの戦後の在り方という包括的知識を問う。

問9 下線部について、適切な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。「地図上から消えてしまった国」という概念的な理解を問う意図の設問だと思われるが、国家が消滅した事例の正誤を選択する、実質二択の知識問題となっている。

第3問 歴史の学びを深める旅先での経験

問1 文章中の空欄に入れる河川の流域の歴史について、適切な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。ガンジス川の地理的な位置についての包括的知識を問うている。

問2 文章中の空欄に入れる文として、適切なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。選択肢が全て正命題であるという工夫もされている。

問3 第二次世界大戦後のベンガル地方の独立の在り方について、適切な文を選択する問題。文

章の読み取りとベンガル地方の地理的知識についての包括的知識を問う問題である。

問4 文章中の空欄に入れる国について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。選択肢が全て正命題であるという工夫が見られる。

問5 文章中の空欄に入れる文と、バイロンの主張の背景に関しての文について、正しい組合せを選択する問題。資料と会話文の読み取りにより、バイロンの考えとその主張の背景を判断する包括的知識を問う良問。ロマン主義に関連させて、その性格を読み取ることができる他の著作を選択させる問題なども可能であったかもしれない。

問6 古代ギリシア・ローマの文化やその受容について波線部の正しい文を選択する、事実的知識を問う問題。下線部が前の「20」と関連しており、小問のテーマとの連続性も見られる。

問7 メモ1の起こった背景について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う良問。資料の丁寧な読み取りを求めるとともに、20世紀初頭の中国の社会文化に関する包括的な知識を問う点で優れている。

問8 メモ2の運動と同時期に起こった出来事について、適当なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。1970年代の世界と中国に関する包括的な知識を問う問題。

問9 メモ3中の空欄に入れる政策を指導した人物と、その政策に関連する資料について、正しい組合せを選択する問題。改革開放政策に関する包括的な知識を踏まえた上で、複数の資料を比較検討することを求める、思考力・判断力・表現力等を問う良問である。

第4問 世界史上における人やモノの流れ

問1 文章中の空欄に入れる空欄の語句と人物について、正しい組合せを選択する問題。スエズ運河の地理的な重要性を根拠に、インドとイギリスの関係、スエズ運河の位置などを含めた包括的知識を問う問題。

問2 運河を利用したと考えられる事例について、適当な文を選択する問題。会話文の読み取りと知識を基に、運河が開通したおおよその年代を特定し、選択肢に示された歴史的事象が、時代や航路などを根拠に通過したと考える妥当性を問う問題。論理整合性に基づいた思考力・判断力・表現力等を問う良問。

問3 中東における出来事について、年代の古いものから順に正しく配列されているものを選択する問題。複数の歴史的事象の関連性を捉え、因果関係を考察することにより正答にたどり着く、包括的知識を前提とした、思考力・判断力・表現力等を問う良問である。

問4 リード文中の空欄に入れる都市について、適当なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問5 グラフから読み取ることができる事柄と、下線部の時期に生じた出来事について、正しい組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。細かい年代の知識がなくとも、リード文やグラフの丁寧な読み解きと、基本的な歴史的知識で解答に至ることができる点で、技能を問う問題として良問である。

問6 アフリカ大陸においてグラフで示した期間に生じた出来事について、適当な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。

3 分量・程度

大問数がひとつ減って4問構成となり、設問数も30問と昨年度より1問減少した。分量は受験者が余裕を持って時間内に解くことができる適切なものである。平均点は昨年度より低下したが、大学入学選抜試験として難易度は適切であったと考える。昨年度に引き続いてリード文が多く盛り込まれており、解答に至るまでにリード文をはじめとする資料を読み取り、語句に関連した歴史的

知識と複合させて解答する設問が増えている。

問題全体を通じて、資料の読み取りに基づいた思考力・判断力・表現力等や、包括的知識を問う設問が多く見られた。

思考力・判断力・表現力等を問う良問としては、以下の問題が挙げられる。[5]は、複数の資料に基づいてこの時期の「独立」の内容を考察させるという、概念の理解を基にした思考力・判断力・表現力等を問う良問。同じく[12]も、地図の描かれ方をはじめとして複数の資料を総合的に読解させ、「国のあり方」について考察させる思考力・判断力・表現力等を問う良問で、この問いは、地図の表現を基に「同質性の強調」という表現を判断させるなど、図像資料の読解を基に思考させる優れたものであった。[20]は、資料より情報を読み取り、ロマン主義に関する包括的な知識を活用し、関連性を考察する良問である。[27]は出来事の因果関係などを根拠として、その出来事の生じた歴史的な流れを整理する、論理整合性に基づいた思考力・判断力・表現力等を問う良問である。ナセルの政策を軸として、ナセルの政権掌握 → スエズ運河国有化 → 第二次中東戦争（スエズ戦争） → ナセルらの支援によるPLO結成 → 第三次中東戦争、という変遷の理解を求めている。

また、知識・技能を問う問題でいえば、[29]は、細かい年代の知識で解答することも不可能ではないが、グラフやリード文などの資料を丁寧に読解することで解答に近づける、論理整合性に基づいた整理を求める点で、技能を問う良問である。[6]は大韓帝国の独立という概念について、[22]は20世紀初頭の中国における社会文化について、いずれも包括的な知識を問う良問であった。一方、「地図上から消えてしまった」という概念を問おうとして、実際には単純な知識問題となってしまった[15]は惜しい問題であった。例えば、幾つかの国を例に出し、国家の消滅の仕方の類型について考察する問題や、多様性を包含しつつ今日でも国家を維持しているインドネシアなどと比較し、その歴史的過程や国家のあり方を比較考察させる問題等に発展させることが可能であったかもしれない。この[15]や[9]の設問などは、リード文で提示されたトピックが興味深いものであっただけに、その主旨が設問で効果的に展開させれば、さらに良いものとなっただろうと思われる。

中間のテーマと関連した設問を連続させる工夫も見られた。第1問中間Bの[5]・[6]は「独立」という概念に関連した設問であり、第3問中間Bの[20]と[21]の下線部⑥は、ロマン主義の内容に関連したものであった。このような関連した設問を続けるなどの工夫により、小問・大問の主旨がより明確に伝わるような各問の設置を、今後とも期待したいと思う。

4 表現・形式

昨年度に引き続き、生徒と教師の会話やさまざまな資料を取り入れるなど、表現の工夫が随所で見られた。用いられた資料は、図絵が2、資料文4、地図3、グラフ1、写真2と、さまざまな形式のものがバランス良く提示されたものであり、初見の資料を基に考察させる問いのスタイルも定着してきている。[5]や[12]のように、文章や写真・地図等さまざまな資料を、歴史的知識と組み合わせる総合的に考察したうえで解答する問題を、今後とも期待したいと思う。

一方、写真や地図などの図像資料に関連する設問について、例えば[12]でリード文中に図の説明として社会主義のシンボルについての解説があるように、問題文中に資料についての詳しい説明があり、解説を主な軸として解答に到達できる設問も見受けられた。問いの確実性を担保することや、難易度が上昇してしまうことなど、さまざまな課題があるだろうと思われるが、可能な限り文章による解説部分を少なくして、図像による読解に基づき解答する設問を期待したい。

また、会話文の場面を設定することについて、複数の視点を提示することや、問題解決の場面を示すという目的があるという点で、その有用性については理解しているが、問題の分量の増加を考えた際に、会話文の内容については精選が必要であるように感じる。今回の試験では分量的な問題

はなかったと思うが、今後問題を作成する際に考慮いただきたい点である。

5 ま と め（総括的な評価）

設問全体を通じて、語句の名称等を問うのみの問題は減少し、資料の読み取りを通じて歴史的事象や人物に関連する政策などを問う問題が着実に増加しており、このような設問形式が定着しつつあると思われる。今回の設問では、「独立」の内容について複数の資料や歴史的な知識を踏まえて考察するなど、資料より読み取った情報と歴史的な知識を踏まえた上で、概念的知識に基づく考察を求めたり、事象相互の関連性などを考察させたりする非常に良い設問が見られた。様々な手段を通じて歴史的事象について深く理解することを求めた今回の設問の方向性は、今後の現場の授業の在り方にも一石を投じるものとなったであろう。

今年度の出題においても、グラフ資料等の丁寧な読み解きや、歴史的事象の相互関係を考察して解答する問題などを見ることができた。このような設問については、年代などの細かい知識を持たなくても、資料の丁寧な読み解きと論理的な思考を展開させることによって解答することができるという点で、資料読解の技能と思考力・判断力・表現力等を問う優れた出題と評価した。今後ともこのような出題をお願いしていきたい。

また、各問において、リード文と各設問との関連が以前より深まり、本文と関連の薄い設問が大分少なくなってきたと思われる。出題される設問文の量が増大すれば、受験者は、必然的に各問いで問われた内容を確認し、そののちに必要な情報を資料より抽出して解答するという流れを強化させてゆくこととなるだろう。そうすると、せっかくリード文で新しい歴史認識につながる興味深い話題を展開しているにもかかわらず、設問に反映されてないがゆえに、一番面白い部分を味わうことなく受験者が解答を終えてしまうということも起こりうるのではないか。今回の設問においても、中間のテーマに関連して問いの内容を連続させるなど、設問に関する様々な工夫が見られたが、今後とも大問・中間のテーマと各設問とが、より深く関連する設問の作成をお願いしていきたい。

今回の設問を通じて、現場の授業者は、授業での資料の用い方や、歴史的事象を包括的な知識に基づいて考察させる授業展開などを、今後ますます意識する必要を感じたのではないかと思う。様々な要因に目配りしつつ、多様な受験者にも対応しうる入試問題の作成に心を配り、多大なエネルギーを使ってこのような問題を作成していただいた皆様の御苦労に感謝申し上げたい。特に世界史Aという科目は、世界史Bとの兼ね合いを含めて、問題作成上様々な苦労があるのではないかと推察されるが、次年度の最後の世界史Aの問題作成に取り組まれている皆様の御苦労に、重ねて感謝を申し上げたいと思う。

なお、今回の評価・分析委員会では、知識のみ、または情報の読み取り、またはその両方のみを必要とする設問を「知識・技能」と分類し、考察、構想、説明、議論する力を問うている設問を「思考力・判断力・表現力等」と分類した。

世界史 B

1 前 文

「世界史B」の受験者数は78,185名と、昨年度より4,801名減少し、3年続けての減少となっている。科目選択率は昨年と変わらず22%となっている。本試験の平均点は58.43点であり、昨年度の65.83点から7.4点減少しているが、日本史Bや地理Bと比較して同水準である。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

(1) 評価の観点

設問形式	年度・出題数	
	令和5年度	
	出題数	(出題率)
主に知識・技能を評価するもの	22	(64.7 %)
主に思考・判断を評価するもの	12	(35.3 %)
合 計	34	(100.0 %)

(2) 分野別の出題数・出題率

分野	年度・出題数	
	令和5年度	
	出題数	(出題率)
政治史	17	(50.0 %)
社会経済史	8	(23.5 %)
文化史	7	(20.6 %)
複数分野に関わる	2	(5.9 %)
合 計	34	(100.0 %)

* 知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、評価・分析委員会の判断による。

(3) 時代別の出題数・出題率

時代	年度・出題数	
	令和5年度	
	出題数	(出題率)
古代史	4	(11.8 %)
中世史	13	(38.2 %)
近世史	4	(11.8 %)
近代史	6	(17.6 %)
現代史	5	(14.7 %)
[うち戦後史]	1	(2.9 %)
複数時代混合	2	(5.9 %)
合 計	34	(100.0 %)

(4) 地域別の出題数・出題率

地域	年度・出題数	
	令和5年度	
	出題数	(出題率)
西欧・北米	13	(38.2 %)
東欧・ロシア	4	(11.8 %)
東・内陸アジア	9	(26.5 %)
南・東南アジア	2	(5.9 %)
西アジア・アフリカ	3	(8.8 %)
中南米・オセアニア	0	(0.0 %)
複数地域に関わる	3	(8.8 %)
合 計	34	(100.0 %)

中世(5c~14c)・近世(15c~17c)・近代(18c~19c)・現代(20c~)を判断の目安とする。

第1問 世界史上の女性の活躍について

問1 文章中の空欄に入れる国の歴史について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。

問2 第一次世界大戦について、適当な文を選択する問題。事実に知識を問う問題。植民地からの兵士の動員で終わるのでなく、動員によって発生した大戦後の自治要求の高まりにも目を向けさせるなど、歴史の大きな枠組みを捉える問題に発展できた可能性がある。

問3 生徒がまとめたメモの正誤について、適当な文を選択する問題。女性参政権や自治領の形成など19世紀から20世紀初頭にかけての大英帝国の包括的な知識を問う良問。

問4 文章中の空欄について、適当な語句を選択する問題。読み取った情報を基に推論する、思考力・判断力・表現力等を問う問題。

問5 文章中の空欄に入れる文について、適当なものを選択する問題。資料から読み取った情報と中国史の知識を基に仮説の根拠となる事象を考察する、論理整合性を問う良問。選択肢の命題が全て正文であるなど、受験者が考察するための工夫が見られる。

問6 6世紀後半以降の儒学について、適当な文を選択する問題。事実に知識を問う問題。

第2問 世界史上における君主の地位の継承について

問1 資料の図について、適当な文を選択する問題。図、家系図、会話文など複数の資料から読

み取った情報を総合する, 思考を問う問題。

問2 ヨーロッパにおけるプロテスタントについて, 適当な文を選択する問題。事実に知識を問う問題。ナントの王令を資料にして歴史的意義を考察させることで, フランスにおける信教を概念化して捉えることを求める問題とすることができたのではないだろうか。

問3 文章中の空欄に入れる人物と文について, 正しい組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。選択肢の文を二つともルイ14世にかかわる事象とし, ナントの王令廃止の影響に着目させるなど, 直接的でない命題とすることで, 思考を問う問題に昇華できたのではないだろうか。

問4 文章中の王朝が10世紀に支配していた半島の歴史について, 正しい文を選択する問題。読み取った情報と知識を基に推論する, 思考力・判断力・表現力等を問う問題。

問5 カリフの歴史について, 正しい文を選択する問題。事実に知識を問う問題。

問6 ファーティマ朝の歴史とカリフについて, 正しい文を選択する問題。読み取った情報と知識を基に考察して, カリフの相対性に気付かせて「カリフ」の概念的理解に導く, 思考力・判断力・表現力等を問う良問。

第3問 歴史における疑問や議論を通じた理解の重要性について

問1 図の出来事が起こった時にフランスを統治していた国王について, 適当な文を選択する問題。図や会話文の丁寧な読み取りを基に知識を問う問題。

問2 文章中の空欄に入れる地域の位置について, 正しい組合せを選択する問題。ナポレオンを中心とする近代フランスと地理的理解が求められる, 包括的な知識を問う問題。

問3 文章中の空欄に入れる学問について, 正しい文を選択する問題。朱子学という用語を使わずに, その内容を問う, 包括的な知識を問う問題。

問4 文章中の空欄について, 適当な文を選択する問題。読み取った情報と知識を基に推論する, 思考力・判断力・表現力等を問う問題。

問5 科挙以前の人材登用制度と朝鮮や日本で見られた人材登用制度に関する考えを述べた文について, 正しい組合せを選択する問題。東アジアの官吏任用に関する包括的な知識を基に丁寧な読み取りを求める, 知識と読み取りの技能を問う良問。

問6 文章中の空欄に入れる語と編纂した王朝について, 語と文の正しい組合せを選択する問題。中国近世史についての包括的な知識を問う問題。

問7 書籍あ・いが『漢書』芸文志の六芸略に掲載されているかどうかについて, 適当な文を選択する問題。漢代以降明代に朱子学が官学化される以前は, 五経を儒学の根本経典としていた知識を根拠に論理整合性に基づいて推論する, 思考力・判断力・表現力等を問う良問。

問8 中国における書籍分類の歴史について, 適当な文を選択する問題。知識を踏まえて丁寧に読み取り, 整理することが求められる, 知識と読み取りの技能を問う良問。

第4問 世界史上に見られる様々な歴史資料

問1 貨幣1を発行した国または貨幣2を発行した王朝について, 適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。

問2 メモの正誤について, 適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。読み取った情報について知識を基にまとめることが求められている点で, 技能を問う問題として優れている。

問3 文章中の空欄に入れる語句と人物名について, 正しい組合せを選択する問題。資料に登場する人物の時期の前後などの関係性について読み取り, 論理整合性に基づいて推論することを求める思考力・判断力・表現力等を問う問題。読み取った情報を基に考察する力を問う良問である。

問4 文章中の空欄に入れる戦争について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。

問5 マラトンの戦いの勝利をアテネに伝えた使者について、適当な文を選択する問題。複数の資料から読み取った情報を相互に関連付けて考察することが求められる、思考力・判断力・表現力等を問う良問。

問6 文章中の空欄に入れる語句と資料が示す「アングル人」について述べた文について、正しい組合せを選択する問題。空欄に入る語句については、選択肢に改善の余地があるが、複数の資料を関連付けて読み解くことを通し、「アングル人」という概念が持つ意味内容の変化に気付かせる、思考力・判断力・表現力等を問う良問。

問7 資料1～3で記されている出来事や事柄の年代について、古いものから順に正しく配列されているものを選択する問題。資料が書かれた年代の知識によらずとも、「入植」→「布教の開始」→「修道士の常駐」と、資料相互の関係からイングランドにおけるカトリック布教の経緯をたどれるようになっている。資料から読み取った情報を基に、複数の資料を関連付ける思考力・判断力・表現力等を問う良問である。

問8 キリスト教が社会に与えた影響について、適当な文を選択する問題。事实的知識を問う問題。大きな枠組みで歴史的現象を問うことが可能なテーマが設定されているため、時代を特徴づけるような影響など、概念的な理解を問う問題に発展させることが可能である。

第5問 歴史統計の意味や意義

問1 マラヤの宗主国の歴史について、適当な文を選択する問題。事实的知識を問う問題。

問2 文章中の空欄に入れる国と下線部の背景として適当な文について、正しい組合せを選択する問題。選択肢に改善の余地はあるが、1920年代のアメリカ合衆国経済に対する包括的知識と、知識を基に資料を丁寧に読み解く力が求められた、知識・技能を問う良問。

問3 1929年当時の東南アジア各地の経済と貿易について、適当な文を選択する問題。表や会話文から読み取った情報を、歴史の知識を踏まえて考察する良問。

問4 文章中の二つの空欄に入れる文について、正しい組合せを選択する問題。資料と会話文の読み取りとイギリスの社会経済に対する包括的な知識が求められる、知識と技能の問題。

問5 文章中の空欄について、適当な文を選択する問題。グラフの読み取りと知識を組み合わせた知識・技能を問う問題。過去に繰り返し出題されているテーマであることから、テーマ選択の工夫が求められる。

問6 イギリス産業革命について、正しい文を選択する問題。事实的知識を問う問題。

3 分量・程度

分量に関しては、試験時間に見合った適切なものである。資料やリード文の読み解きを踏まえた出題では、テキスト量が増加する傾向にあるので、不要な表現はないか等、これからも常にチェックしながら問題を作成していただきたい。難易度は、大学入学希望者の学力を測定する試験として適切なものであった。

問題全体を通して、資料の読み取りを伴った考察や内容的理解を伴った包括的知識を問おうという意図が感じられる問題が随所に見られた。今年度の出題の在り方については、今後も大いに参考にして欲しいと考える。[5]は、仮説の根拠を史実を基に考察する問題で良問である。選択肢の全てが正命題であり、受験者が論理整合性から正答を導くための工夫が見られた。仮説の根拠となる歴史的現象を考察する問題は思考力・判断力・表現力等を問う問題として優れている。この問題のように、受験者が持っている知識を「活用」し、歴史事象に新たな意味を付与していくような問題は、思考力・判断力・表現力等を問う問題として今後とも取り入れて欲しい。[12]は読み取

った情報を基に考察をすることで、受験者が持っている既存の知識に新しい理解を与える非常に意欲的な問題であった。受験者は、この問題を通して、「カリフ」の語が持つ多様な意味に気付いたであろう。歴史においては、ある事象に対して資料から読み取った情報を基に考察して、新しい意味や意義を見出すプロセスが非常に重要である。受験者が受験を通して新たな気づきを得て知的探究心をくすぐられるような意欲的な出題を、これからも期待したい。19は、知識を根拠に推論を働かせる問題であり、思考力・判断力・表現力等を問う問題として非常に優れている。この問題については、明代以前の儒学が五経に基軸を置いていたという、根拠となる知識に気付けるかどうか、正解不正解を分ける。知識を活用して考察する問題の出題方式として、今後とも挑戦してもらいたい。20は、知識を基に資料を読み取って考察する問題で、思考力・判断力・表現力等を問う問題として優れている。共通テストでは、資料の読み取りと知識を組み合わせた問題が出題される事例も多い。この問題のように、知識を前提にして資料を読み解き、読み取った情報と知識を止揚するような問題は、思考力・判断力・表現力等を問う問題の好例として、今後も出題してもらいたい。

23

は資料を丁寧に読み解き、人物の関係性を読み解いた上で、推論を働かせることで正答に至る問題であり、思考力・判断力・表現力等を問う問題として良問である。

事実的な知識だけでなく、概念的な理解や知識を問おうという意図も随所に感じられた。先述した12は思考した結果、カリフという語が持つ意味が重層的になり、カリフという用語の理解を概念的な理解に深化させている。これは概念的知識を問う問題としても、大変優れた問題である。26は「アングル人」という語の持つ意味の変化を考察する問題であり、「アングル人」に対する概念的知識を求める問題でもある。歴史の用語は時代や文脈によって多様な意味を持つ。時代による含意の変化から、歴史の用語が概念的知識であることを受験者に気付かせる、非常に優れた問題である。

17は読み取りの技能を問う問題として非常に優れた問題である。受験者は中国の官吏任用制度に対する包括的な知識を前提に、会話文の丁寧な読み取りによって正解へ至る。正解ではない選択肢が明らかな誤命題である点などには、改善の余地が残されているようにも思えるが、知識・技能の問い方として今後、参考にしていってもらいたい。

4 表現・形式

全ての中間単位で資料や会話文等が設定され、資料やリード文を読むことを前提に作成されていた。中間ごとのまとまりが意識されており、世界史の授業における「単元のまとまり」を踏襲して作成されていた。第1問A、第2問A、第3問AB、第4問AB、第5問は、高校での授業の場面を想定した問題である。いずれも、生徒が資料から情報を読み取り、読み取った情報について考察するという流れが生徒と教員の会話の中から引き出されており、資料を中心にした授業の展開を示したものとなっている。新しい出題として、大学での学びの場面も設定されていた。高校での学びが大学につながっていることを生徒にイメージさせる意味で、いいメッセージになったのではないだろうか。今年度の出題では、提示された資料を読み取らなければ問題を解答することができないよう構成されており、資料の使い方としても大変良かったといえる。

今年度の問題は、高校の授業に対しては、このままでも十分に資料を中心とした授業の在り方を示唆してくれているが、今後のために強いて言えば、「問い」や「主題」にフォーカスして出題するということがあってもいいのかもしれない。世界史の授業では単元や1時間ごとのまとまりを作り、問いを中心にして作られる。最初に提示した授業の問いをまとめたり、生徒が問いを表現する場面を想定したり、ということにも是非挑戦してもらいたい。

5 ま と め（総括的な評価）

本試験「世界史B」では、解説文や会話文を含めた資料に基づき、読み取りや思考を問う問題を出題しようという明確な意図が見られた。いくつかの小問では、明らかな誤命題を含む選択肢から、受験者が出題者の意図と異なる解き方で正解に至る可能性がある問題も見られたが、総じて大問や中間のテーマに沿って、リード文や資料と結び付けられて出題された良問であった。

今年度の問題を解答していく際には、受験者は時代を読み解く枠組みとしての歴史の知識を持っているかどうかが問われていた。資料やリード文を読み解く際には、歴史の枠組みの知識を持って読むことでテキストを速く正確に読むことが出来る。歴史の知識を前提として読む、という行為が国語的な読解との最大の違いなのであろう。歴史の読み解く枠組みとしての歴史の知識を用いずに国語的に読み取ろうとした受験者は、問題文の読み取りに大きな時間を取られたかもしれない。受験者は、一問一答的な知識ではなく、歴史の文脈の中に位置づけられた総体としての歴史像を獲得することで、正解に近づいていく。今年度の問題からは、高校生が身に付けるべき世界史の知識の在り方に対する、出題者からのメッセージを感じた。この方向性はこれからも是非とも継続してもらいたい。

受験者の思考力・判断力・表現力等を中心に知識・技能も測るという共通テストの目的に照らし合わせて、本試験「世界史B」の問題は、ここ数年の試行錯誤に対する一つの答えと言っているのではないだろうか。これを一つの基準として今後の問題作成に生かしていただきたい。我々高校側においても、今年度のような問題に対応するには、一問一答的な知識の暗記のみではなく、資料を読み解いたり、問いに基づいて考察して議論したり論述したりすることで、生徒自身が知識を活用して思考する場が求められるであろう。入試のために高校の授業があるわけではないが、出題者からは高校の歴史教育で身に付けてほしい力に対する、強力なメッセージが発信されていた。高校の授業者としてこのメッセージに応えられる授業を追求していきたい。

さらに問題をいいものにしていくために、次年度以降に向けて検討してもらいたいことが何点かある。一点目は、歴史分析概念に対する出題である。令和4年度問題においては「ファシズム」概念そのものを問う問題が出題された。12では、「カリフ」を概念化して捉え、相対性に気付かせる問題が出題されており、大変評価すべきところである。これからの時代を生きる受験者たちには、現在も歴史的評価が定まっておらず、多様な解釈が可能な事象についてこそ、自分自身の根拠の明確な見解を持ってもらいたいと考えている。是非とも、多様な解釈が可能な歴史分析概念を考察するような問題を検討してもらいたい。二点目は、出題される地域や時代のバランスについてである。テーマに則った出題を行っているため、必ずしも単年度で全ての地域・時代について出題する必要はなく、数年単位でバランスが取れていればいいと考えている。それでも、単年度単位において地域・時代のバランスを取っていく努力をこれからも続けていただきたい。

総じて、本試験「世界史B」は、大学入学希望者の選抜を行う試験としてのみならず、高校の教育現場に対する授業の在り方の投げかけという意味でも、非常によくできた問題であった。

来年度は現行教育課程で行われる最後の共通テストであり、経過措置を除いては世界史Bとして最後の出題となる。新科目である歴史総合・世界史探究につながるような、問題を期待したい。

大学入学希望者の学力を測る上でも高校で身に付けることを目指す力を示すうえでも大変優れた問題の作成には、多大な苦勞を要したであろう。問題作成に当たり、御尽力いただいた委員の皆様々に感謝申し上げます。